田中の奴め!!

絆創膏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
田中の奴め！！

【Ｎコード】
Ｎ８８８４Ｇ

【作者名】
絆創膏

【あらすじ】
誰もが喜ぶ春うらら。出会いを喜ぶ者もあり。ただそれを貫くことの難しさ。口利けねば相手のこころ遠からず。咲き知れぬかはわが不幸。

始まりの春（前書き）

短編の意味を履き違えてました。
２話目がある時点で長編なんですね
まぁ、あまり長い話ではないから短編かと。

まぁ、この物語にはＳＦ的なものは無いと思います。
そのへんの線引きが甘いとも思えますが。
これは個人差があると思います。

ＳＦにはついていけない人向けではありますが、本当に見てほしいのは若い人ですね１０代の人
なんらか感じる事柄があればいいんですが

短編のほうは自分で削除できれば削除します

始まりの春

［今年も四月がやって来た。当然の事だが、一年四月がなくなると一年中楽な気がする］

痛みが来る。胃のやつだ。こいつはいつでも正直だ。
医学的にはわかっていても結局痛いものは痛い
結果、何時何分に起こるかまではわからない。しかし、痛み出したとき初めてわかる。
その時、初めて４月を実感する。

春はいい。桜が好きな私は生粋の日本人だ。３月のうちは酒が飲める。
４月になると酒は飲めないのに医者に止められる。理由はそれとなくわかる

なにか音がする…多分ノックの音だ。
こういう時に限ってと思うが当然ノックの音はなる

集中している私はこれがノックの音とわかっていても一度では返事はしない
馬鹿げている、とどこかで感じている　今が一番しんどいのだ。一年で一番苦しんで
集中しているときに限って…と

二度目のノックで返事をして彼が入ってくるのはいつものことだ

『鈴木社長』
こう呼ばれても返事ができないときがある。

あまり鈴木という呼び方に慣れてないと思う
あだ名で呼ばれれば絶対に反応する。不自然だから。
周りはボケているとしか見ていないが、昔からこうなのだ
多分もう治ることはないだろう

『社長』
これでようやくわかる。

『どうかしたのかね？井の頭君』
こいつにだけは鈴木社長と呼んでほしくない。ずっと連れ添ってきた仲なのに
むしろ私の事を一番よく知っているのに何故理解できないのか。私から言わせればこうだ…お前がぼけたのだと

『君は覚えやすい苗字でいいね』
『私にとっては嫌味にしか聞こえません。私の苗字は自分は覚えていても、他人には覚えにくいんですよ』
『私にはそれが羨ましい。鈴木なんて苗字はたくさんいたんだよ。だから鈴木と言われても私の事なのか他の鈴木のことなのかがわからないんだよ』
『私に言われてもわかりません』

他人のプリンが羨ましいということがよくわかる
結局そのあたりは子供なのだ

『今年の新入社員のことなのですが…』
嫌な事柄の時は彼からきりだす。こういうときだけ権力を使う私は嫌な大人だ。
『何人だね』
途端、彼の顔が緩む

何かいい報告でもあるのだろうか。もしそうならば今年は楽しく過ごせそうだ
『１７人です』
ため息が出た。心の底からの素直なため息だ。
『なんで顔が緩む？それのどこがいい報告だ？』
嫌味と決め付けた私は率直に聞く
『去年は１６人です』

なんてことはない、去年も嘆いていたことは覚えているが、数を覚えていなかった
嫌なことは酒で忘れろ。
いつのまにか染み付いていたことだ。
昔は酒が嫌いだった。それは覚えている。
でもいつしか酔っていたのだと

自分が変われるとは思えないが、変わると言う行為をやめれば終わりだと
桜が好きだという日本人特有の美学のほうが刷り込みかもしれないのだと
変わるとはそういう事なのだ

しかし、否定できるだろうか？去年も同じ事を思ったのではないかと。

始まりの春（後書き）

一話だけではあらすじはあまり…
この先の展開がわかるとしらけるかも知れないので

彼には理解できない

2

彼には理解できない

私はパソコンが嫌いだ。目が疲れると初めは思ったが、この行為自体が好きではない。
子供の頃、難しい本を読んだことがある。恐らく難しいと思った事自体、初めてなのだ
その本のことをいくら理解しようとしても理解できない。当然だ。文字も読めないのに理解できるはずがない
その後は言葉から勉強し、それでも本当に理解できたのは二十歳を過ぎてからだ。その本の中身は今でも忘れることができない
その時に目が疲れるとは思わなかった
だから私は漫画が苦手だと思うのだ。恐らく嫌いではない漫画も存在したのだろう。

逃げている…どこかでそう理解している。
だから、最近入った若い部下の行為は理解できない

『それは逃げている』
こういった言葉を会議中に独り言としてもらしてしまう。
社員は独り言としてとらない。いや、とれないのだ。
独り言など本来一人のときにしか成立しないのに成立することもある。
こういう立ち位置なのだ
俗世が満足しようが私はまだ上をみたい

誰がどう思おうが、私のこういった部分は否定できないし、嫌いにはなれない

ワンマンなどそういうものか…割り切ろうともした。
そういう時代である…それでも言い訳にはならないのかもしれないだが、諦めたくない。それでは悔いが残る。
何かを求めてはいるものの受け付けないのだどうしても。

コンコンと音がする。
もう少し強く叩いたほうがいい。
私の耳には届くが、もしかすると若いものより耳だけはいいのかもしれない

『どうぞ』

一度で返事をする

嫌な事柄も終わればあまり苦しくはない。むしろその過程が嫌なのだ

『例の件ですが…』

この部屋に訪れるのはほとんどの確立で奴だけだ。
他の者が訪れる時はノックの必要がないときだけだ

『お決まりになりましたか？』
『今年は7人いるな。京大が4、東大が3か…昔は京大等勉強しか能がないものが集まったものだが』
『今は京大の評価のほうが高いらしいです』

…ブランド感覚か

勉強が嫌ならほかの道を探せばいいのに

『今年は何人残るのか…』

『半分は残りますよ。うちは天下の…』

あれだけ口に出すなと言うのに…そういったところは昔から変わらんな

天狗にだけにはなりたくはない。もっと上を目指したい…これはいけないことなのか？

3

逆転の男

2ヶ月がたった。まだやめたものは一人もいない。無断欠勤などはしないだろう。
私は学力などは求めていないのかもしれない。実際、高校卒業でもここには入れるのだ
かくいう私も高卒だ。
それでも面接の時点でそんなやつがうちにくるはずがない。
書き間違いとでもとらえられているのだろうか。

最悪、光るものがあればホームレスでもいい。才能などいつ光りだすのか本人が一番わかってないのだから
しかし、それではナンセンスなのだ。

企画書というものをどう捕らえるのかはいまいちわからないが、目立つほうがいい。
発想など固定しないほうがいい。

『しかし、字が汚いな…』
ここまでくれば速記を読む能力が問われると思うが
大筋でそのものの言うことが一番理解できる
これは、先読みにしても大胆なほうだろう
いろいろ気になる事があったが、そういう時は私が動かなくてはならない

ただ、この者に直接いうことはできない。とんだプレッシャーだからだ。

『井の頭君。ちょっと』
私は社長室から動くことはめずらしい
それだけで空気が淀むのが耐えられないのだ

『この字がよく読めないんだがね』
『私にもちょっと』
『もう一度出させます』
『いや、だいたい言いたいことはわかるんだが…』

言い出しづらい…いちいち言うことかとも思うのだが

『名前がよくわからないんだ…田中か田上かが…いや、田のほうはまだしも』
『田上のほうの字は綺麗ですが』

やってしまった。難しい事柄ならまだしも、何故こういったミスは治らないんだ。

上を向く男と周りを気にする大人（前書き）

主人公は田中でいく

上を向く男と周りを気にする大人

4

上を向く男と周りを気にする大人

『田中か…』
こいつはよくわかっている。企画の趣旨を見透かしている。
はっきりいうと一つ、二つとトラップをしかけておいた。
率直過ぎると役に立たん。そういう形の挨拶もある。
実際、騙されるのだ。それを味方が先に教えなければいけない
だが、安直なトラップなどはほとんどかわせるのだ。
あいつらが頭がいいことなどは知っている
だが、３つめのトラップなどはわかるだろうか？

井の頭は率直なところがあるからあいつを傷つけるかもしれん
そういう繊細なタイプはすぐにやめていくだろう
だが、社長の顔などそれ以上に傷つけかねん
『女でいくか』
だが、自分の意見を権力にまかせて伝えていいのだろうか
『はぁー』
仕方ないと割り切る。自然と出るため息はどうしようもない
こういう事は美人に任せる。
自然とできるこういう行動。

『あれが田中か』
遠めでみる行為。何の理由があるにせよ、これではスパイやストーカーだのいわれる
田中を見る。外見は普通だな。でも、学歴のほうがめちゃくちゃだ

まぁ、それはいい。多分苦労したんだろう。

それよりなんて長話だ。それほど深い話なのか？
なんか笑ってるが、なにを笑う必要がある
それより報告はまだなのか！！早くしろ！！

『どうだったね？杉下くん』
杉下くんは年齢より若く見えて尚且つ物分りがよくて本当に助かる。
『す、すみません』
心なしか顔色がよくない。青ざめている。杉下くんほどの人が
何かミスをしたとでも？
『第一声は私からかけたんですが、あとはその…いろいろとそちらの話題にもっていこうとしたんですが…なんか向こうの人が全然聞いてくれないんです。それで…』

むこうのペースに…か。よっぽどがっついていたんだろう。

やはり、なにかしらの後ろめたさがあるときはうまくはいかない。
この歳になると結論のようなものがある。私は諦めるべきかもしれない。

正攻法

正攻法

石の上に3年も座れまい

『はぁー』

とんだプレッシャーだ。車輪がはずれた人生もいいが、付き合う身にもなってほしい

どうすればいいのだ。と

年寄りの間合いとは結局奴と同じ、一声をかけられるまでが異様に長いのだ。

言い訳がましいと思うが。もう口に出す時点で言い訳だ。

田中は自動販売機にいるが、私はどこにいるのやら

『田中君』

聞こえるわけがない声でいう。

当然のことながら聞こえない。

『田中君』

…しかし今のでも聞こえないか

『田中！！』

田中はびくりとするが、私には安堵感しかない

私は教師には向いてないだろう
だが、気持ちは伝わる。それだけ高い壁だ。

田中『まいったね。』

鈴木『何がだ』

田中『いまいちピンと来ないけど…やっぱりね』

鈴木『先生だろ？』

田中『そりゃあそれもあるけど…田中もいっぱいいるしね』

鈴木『昔からあることはあるが、若い者は知らん奴が多い。きびきび働く奴は
すぐにやめるし。無断欠勤は1度したらほとんどもう来ない』

田中『それはわかるんだけど…まぁあんたは誰？掃除とかする人？』

鈴木『ならこれは』

田中『今は背広着てやる人もいるかもしれないよ？もしかして罰ゲームかなんかで』

一瞬考えたがむしろそっちでもいいかもしれない。楽だろうし。
なによりやめられたら元も子もない

桜散るころには打ち解けているかもしれん
他人にはかわからぬだろうが私は孤独なのだ
孤独であることに酔ってしまったのだ

バッティングセンター

6

バッティングセンター

若者の考える事はわからん。
そもそも仕事帰りに来る場所か？

疲れてはいない…が、安堵感から来るものもある
『こんなところ』
ぼさりという言葉など聞こえまい
『できたのはわりと昔ですよ』
『そうか』

どうでもいい…ゴルフだろうがキャバクラだろうが自らの意思で行くほうが正しい。

しかし、うきうきしているな
野球は今でも見る。義務からなのか、好きなのかわからんことがらの一つだ
理屈ではわかるが…

正直にいうと８０だろうが打てないと思うが…あまり早く感じないのは
そのあたりもゲーム感覚だろうか…

勝手にしろ。考えても疲れる

鈴木『よし、やってやろうじゃないか。若い頃私もな』
そんないい加減なことを言いながらバッティングエリアに入る
田中『とにかくミートすることを大事にして』
一球目、ブンッと鉄のバットを振る。バットは空を切る
田中『あっちゃー早すぎるでやんの』
鈴木『もう一回だ！！』
かすった！！
鈴木『どうだ！！』
３球目でミートして球は気持ちよく線を描く
田中『中々やるじゃないか！！次は僕のばんね』
田中は急速を上げているそんな速い球が打てるはずが…
田中『うぉーい！！』
田中は１３０キロの球を簡単にミートして誇らしげに手を振る
田中『このくらいはやってやらないとね』
鈴木『私もやる。よこせ！！』
そんなこんなで意外に楽しめた時間が過ぎた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8884g/

田中の奴め!!

2010年10月9日07時46分発行